

# 第26回獣医学特別セミナー

人ごとではない！？

類鼻疽菌*Burkholderia pseudomallei*  
の拡がり と類鼻疽における生体防御

2016年 2月17日 (水)

15:30-17:00

iCOVER 1階101 (形態構造学実習室)

講師：阿戸 学 博士

(国立感染症研究所免疫部長)

類鼻疽（感染症法：4類感染症、家伝法：届出伝染病）は亜熱帯地域の土壌や水に存在する*Burkholderia pseudomallei*（三種病原体）の暴露によって起こる重篤で治療困難な感染症である。ワクチンは未だ開発されておらず、生物テロの使用が危惧されている。我が国でも淫浸地帯に長期滞在歴のある患者の発生が散発的に認められ、グローバル化に伴い類鼻疽の国内発生のリスクは存在することに注意が必要である。病態は、敗血症から不顕性感染まで様々な病型をとるが、治療にかかわらず菌は完全には宿主より排除されず、30年以上も潜伏感染したのち、再発することがある。再発の主要な危険因子は糖尿病であるが、その発症機序に関する免疫学的検索はなされていない。*B. pseudomallei*は食胞から細胞質にエスケープすることによって、感染を拡大していくが、好中球では食胞からエスケープできず、新規オートファジー関連機構によって殺菌されることが判明した。これより、好中球が類鼻疽生体防御の鍵となることが示唆され、類鼻疽の淫浸地帯であるタイ王国コンケン大学との共同研究で、タイ人糖尿病患者および健常人より精製した好中球の*B. pseudomallei* に対する*in vitro*防御機構を解析した。その結果、糖尿病患者由来好中球は、健常人由来好中球に比べて貪食能や遊走能の低下、好中球DNA(NETs)の放出低下による殺菌障害が認められた。また、糖尿病薬であるGlibenclamideは好中球インフラマソームを抑制し、好中球機能低下に寄与していると考えられる。以上より、類鼻疽で糖尿病が発症危険因子である理由として、糖尿病患者における好中球機能障害が原因である可能性が示唆された。

★ 教員・学生の積極的な参加をお願いします！ ★

連絡先：高野 愛 (5855)  
加納 聖 (5883)  
清水 隆 (5895)

共同獣医学部

